

北京の日本人教習と大阪の中国語教育

菅野正

一、北京の日本人教習

- (一) 太田達人―夏目漱石の描く「Oという人」
- (二) 中島裁之―東文学堂
- (三) 三島海雲―内陸アジア研究所
- (四) 清水安三―「北野と南開」

二、大阪の中国語教育

- (一) 府立大阪中学校
- (二) 興亜会支那語学第二分校
- (三) 市立大阪商業学校
- (四) 市立大阪高等商業学校
- (五) 私立大阪外国語学校
- (六) 大阪清語学校

三、おわりに

一、北京の日本人教習

- (一) 太田達人―夏目漱石の描く「Oという人」

夏目漱石『硝子戸の中』のなかの「九」、「十」に次のような文がある。

九「私が高等学校にいた頃、比較的親しく交際^{つきあ}った友達の中にOという人^{*}がいた。その時分から余り多くの朋友を持たなかった私には、自然Oと往来^{ゆきま}を繁^あくするような傾向があった。……

大学を卒業すると間もなく彼は地方の中学に赴任した。私は彼のためそれを残念に思った。しかし彼を知らない大学の先生には、それがむしろ当然と見えたかも知れない。彼自身は無論平気であった。それから何年か後に、たしか

三年の契約で、支那のある学校の教師に雇われて行ったが、任期が充ちて帰るとすぐまた内地の中学校長になった。それも秋田から横手に遷されて、今では樺太の校長をしているのである。……去年上京したついでに久しぶりに私を訪ねてくれた……」

十「……我々はその晩帝劇へ行った。……折々隠袋から金縁の眼鏡を出して手に持った摺物を読んで見る彼は、その眼鏡を除さずに遠い舞台を平気で眺めていた。

「それは老眼鏡じゃないか。よくそれで遠い所が見えるね」「なにチャブド、*」

私にはこのチャブド、*という意味が全く解らなかった。彼はそれを大差なしという支那語だといって説明してくれた。……

私は彼を思い出すたびに、達人たつしんという彼の名を考える。するとその名がとくに彼のために天から与えられたような気になる。そうしてその達人が雪と氷に鎖された北の果に、まだ中学校長をしているのだなと思ふ。」

『硝子戸の中』は一九一五年（大正四年）一月から二月にかけて、『大阪朝日新聞』『東京朝日新聞』に全三十九回

にわたって連載されたもので、九は同年一月二十一日、十は翌二十二日に掲載された。

九の「樺太」*については岩波文庫、二〇一一年二月第七十九刷版の註に「現在のソヴェート連邦領サハリンの日本名。日本は日露戦争の講和条約で、北緯五十度以南を領有していたが、第二次大戦後、一切の権利を放棄した。」とあり、十の「チャブド」*については「中国語。差不多と書く」とある。

さて、「〇という人」*は、岩波文庫版『硝子戸の中』の九の註に「太田達人のこと。岩手県出身で東京帝国大学理科物理学科卒」とある。

太田達人は一八六六年六月、岩手県士族の家の生れで、一八九三年七月、東大卒業、同年九月石川県尋常中学校教諭嘱託、翌年教諭となり、一八九九年三月大阪府第一尋常中学校に校長として着任した。三十二才であった。中学校の校名は同年四月に大阪府第一中学校、つづいて大阪府堂島中学校と改称され、太田達人が三年半ののち、校長を辞任した当時は、大阪府立北野中学校と改称されていた。

漱石の文にある「……たしか三年の契約で、支那のある学

校の教師に雇われて行った。」の経緯についてふれておこう。「支那のある学校」とは「京師大学堂」のことである。

王婉「清末京師大学堂の創設と日本」上、下、『共立女子大学総合文化研究所年報』第七号、第八号（二〇〇一年三月、〇二年三月）から、まず、京師大学堂総教習、吳汝綸（一八四〇～一九〇三）について。吳は日本の学校制度、運営全般の調査のため一九〇二年六月、来日した。日本の各界はあけて歓迎し、関係機関も、国賓待遇で対応した。

吳汝綸は安徽省桐城県出身の碩学で、二十六才の時、科挙試で進士の資格を得、各地の知州、知府を歴任ののち、一八八九年から保定の蓮池書院院長となり、人材育成にとめた。また洋学にも造詣が深く、曾國藩、李鴻章に認められ、その幕僚となって、両者の重要な上奏文の多くを起草したという。

京師大学堂とは、今日の北京大学の前身で、中華民国成立後改称されたものである。以下、北京大学堂と表記する。

一八九八年、各地の初等学堂、中等学堂、高等学堂の上になつた最高学府として北京に設立された。しかし、その頃に始まる義和団運動が華北にも波及し、義和団が北京の外国公使館街を包围・攻撃した。八ヶ国連合軍が北京を占領

し、北京大学堂校舎はドイツ・ロシア軍の兵営として占拠され、大学堂は閉鎖を余儀なくされた。一九〇一年には義和団事件の終始末の辛丑条約が締結され、光緒新政の改革が始まった。閉鎖されていた北京大学堂が正式に再開され、張百熙が管学大臣に任命され、吳汝綸を大学堂総教習に推薦することを上奏した。吳汝綸は就任に先だち、日本の学校制度全体を調査する目的で日本に赴いた。が、もう一つの目的は大学堂の教員を充実させるため、日本人教習を選べることもあった。

張百熙は北京大学堂に、従来の西洋人教習にかえて、新しく日本人教習を招聘しようとした。以下は、外務省外交史料館保管文書『外国官庁ニ於テ本邦人雇入關係雜件（清国之部）五』より。張は、五月十二日、駐清公使、内田康哉を訪れ、その旨を告げた。（内田、五月十七日報告）

「仕学科（官吏養成科）ニ法学博士一名及其助教タルベキ学士一名、又師範科（教員養成科）ニハ文学博士又ハ教育ニ実驗アル相当ノ人一名ト其助教タルベキ学士一名」合計四名である。延聘年限は三年とし、「渡来時期ハ我九月上旬マデトシ」、俸給については「目下大学校ノ經費トシテ露清銀行預ケ金五百万兩ニ対スル利息二十万兩ヲ以テ之

ニ充テアルモ、創業ノ際費用多端ニシテ充分ノ餘裕ナキニ付、將來増加スルコトアルベキモ、目下ノ処ハ日本金貨五百円マデヲ限度トシ、又助教授タルベキ学士ニ対シテハ、金貨三百円以内ヲ限度」とすることした。(読点は引用者。以下同様)

このような清国側の要請に応じ、日本外務省は早速人選に着手し、文部大臣菊池大麓に推薦を依頼した。そして四月にわたる選考の結果、師範館正教習に東京帝国大学文科大学教授服部宇之吉文学博士、副教習に大阪北野中学校校長太田達人理学士、仕学館正教習に京都帝国大学法科大学教授巖谷孫藏法学博士、副教習に会計検査院検査官補佐杉栄三郎法学士の四名を選んだ。

右の『外交文書』には日本人教習招聘に関する関係官庁間の往復文書が多数収められているが、その中で、太田達人の処遇関係のものに以下のようなものがある。

小村寿太郎外務大臣より菊池文部大臣宛に(九月十八日)

「拝啓陳バ、大坂北野中学校校長理学士太田達人儀、此度清国管学大臣ノ聘ニ依リ、北京大学堂師範科助教授トシテ不日渡清ノ筈ニ有之候処、在官ノ儘渡清スルト否トハ、先方ニ於テ大ニ待遇上ニ相違有之候、服部巖谷両教授ハ素ヨ

リ、仕学科助教授会計検査院検査官補杉栄三郎モ在官ノ儘赴任スルコトニ相成ルニ付、太田理学士ニモ同様ノコトニ致度、就テハ特別ノ御詮議ヲ以テ、此際同人ヲ貴省高等官ニ転任セシメ、然ル後、現官ノ儘清国政府ノ聘ニ応ジ候事ニ御取計可成候様致度、此段貴意ヲ得タク御依頼候敬具」と太田達人に文部省の高等官の肩書を付与できないかの配慮を請うている。

また、小村大臣から在清内田公使宛には(九月十九日)

「…助教授俸給ノ儀ハ大約金三百円位トコトニ豫テ御申越相成候処、太田理学士ハ、去明治二十六年大学卒業以來教育事務ニ従事致候若人物ニ有之、其経歴ニ於テ杉法学士トハ自ラ徑庭アル儀ニ付、出来得ベクハ俸給ノ上ニ於テモ相応ノ差ヲ設ケ度、若シ一方三百円ニ対シ、同氏ニハ三百五十円支給ノコトニ確定相成候ヘバ、好都合ト存候間、右御含ニテ御尽力相成度：赴任旅費ノ儀ハ杉氏ト同様ニ御取計相成度御願申候」と俸給の増額等処遇の改善に計るよう指示している。

また在清内田公使から小村外相宛に(十月十三日)

「…副教習ノ：俸給ハ毎月清国銀之三百六十元(即我金貨三百円ノ換算高)ト約定シタル点ノミ差異有之、旅費借

家料等ニ至ルマテ、正教習ト同額ニ相成候：追テ師範科助教授太田理学士ハ四ヶ年、仕学科助教授杉法学士ハ三ヶ年、契約ニ相成候」と報告している。

しかし、さらに内田公使は小村外相に宛て、先の太田理学士の俸給に対し相当の待遇を与えるようとの点に關して「：助教授ノ俸給ハ毎月三百以内ト内約ニ有之、今更右以上ノ請求ヲナスハ、大学堂ニ於テ処分ニ苦シムノミナラス、其請求ヲ今日ニ提起スルハ、甚タ不得策ト被考候間、其内、序ヲ以テ太田理学士ノ経歴ヲ張百熙迄申聞ケ、他日大学堂ニ於テ該助教授等ニ特別ノ待遇ヲ与フル場合ハ、太田理学士ニハ格段優遇スベキ様勸告スル事ニ致シ：」と北京大学堂側への配慮も必要であることと今後とも尽力する旨を、同日十月十三日報告している。

このように、外務省、文部省では、トップの大臣が、じきじきに太田達人の処遇についていろいろ配慮し、接渉を指示していたことが窺える。結果的に、太田達人には(一)「大阪北野中学校長・理学士」の肩書にかえ、「文部省図書審査官」という官名が付与された。(二)契約期間は当初の三ヶ年が、四ヶ年の契約となった。(杉法学士は三ヶ年)(三)旅費・房租費(銀四十五元)は四教習とも同額。(四)俸給は、東京

帝国大学文科大学教授、文学博士、正教習・服部宇之吉の月給六百元(金貨五百円程度)に対し、副教習・太田達人には、月給銀三百六十元(金貨三百円以内程度)となった。三百五十円に増額されたか不明。なお、太田達人が三年半前、三十二才で大阪府第一尋常中学校校長に着任した時の年俸は千二百円であった。

『北野百年史』(一九七三年四月)五三九頁の九月二十九日『官報』写し。

大阪府立北野中学校長 太田達人
願ニ依リ本職ヲ免ス

明治三十五年九月二十七日(内閣)

こうして太田達人は一九〇二年九月二十七日付で校長を辞任、二十九日『官報』で告示される。当日催された送別会の模様を伝える文の中に「：今や文部省図書審査官に任ぜられ在官のま、清国北京大学堂の教官となり彼土に赴かることとなり：」とある。

九月三十日、太田校長の送別式が講堂で行なわれた。太

田校長は

「…何事ニ従フモ何処ニ在ルモ誠意ナラスバ功ヲ成スコト難カルベシ諸子宜ク至誠ヲ以テ学ヲ講シ業ヲ習ヒ身ヲ立テ事ヲ遂クル基トスベシ…」とのべた。

その後「五年級生徒八木秀次は進みて全生徒に代りて答辞を朗読して式を畢りぬ」とある。八木秀次は二年より特待生となり、翌春、首席で卒業して、第三高等学校を経て東京帝国大学に進み、電気工学を専攻した。後、大阪帝国大学総長になり、文化勲章を授つた人である。

十月一日、太田達人は北京へ向け出立した。当日午前六時より職員生徒一同、梅田停車場前に整列して其の行を見送った。翌二日太田達人は「字品發御用船ニテ仕学科助教授杉法学士ト同道赴任…」した。(前掲『外交文書』)

帰国以降の太田達人の動向は、岩手県立盛岡第一高等学校『図書館報』第三〇号(一九七九年十二月)の「佐藤北江・太田達人展」から紹介しよう。

太田達人は、任期充ちて、北京大学副教習を退任、帰国してのち、一九〇七年三月二十五日、秋田県立秋田中学校校長になって赴任した。文部省高等官への復帰でもなく、

いわゆる昇格人事でもなく、北京大学赴任前と同じ公立中学校長といわば横すべりの人事であった。

ところが、一九一〇年九月十三日に「ボート遭難事件」がおこった。戦艦「三笠」が秋田沖に停泊した際、秋田中学では全校生徒が見学に出かけることにした。しかし当日は強風で波が高く、太田校長は危険と判断して観艦を中止したにもかかわらず、ボート部員十名がボートに乗って「三笠」に向かった。大波のためボートは転覆、七名は救助されたが、三名は行方不明となった。太田校長は、中止命令を出したにもかかわらず、その全責任を問われ、秋田県立横手中学校校長に、さらに樺太中学校まで転任させられた。夏目漱石はその事件をひどく気の毒がり、「秋田の馬鹿知事」とのしり、太田達人のために高い地位を推挙しようとしたが、太田達人がこわつたらしい、という。

その後、太田達人は樺太の地に十年近くいたが、健康がすぐれず一九二一年内地にもどった。その年四月岩手県立盛岡中学校に講師として赴任した。一九二五年五月退職。

一九四五年六月十日没。七十九才。

夏目漱石は『硝子戸の中』の「九」と「十」の全文を太

田達人のスケッチにあて、過去への追想と現在への思い入れをのべている。

「〇は東北の人だから、口の利き方に私などと違った鈍でゆつたりした調子があった。」何度も議論をしたが、「遂に彼の怒ったり激したりする顔を見る事が出来ずにしまった。私はそれだけでも充分彼を敬愛に価する長者と認めていた。彼の性質が鷹揚である如く、彼の頭脳も私より遙に大きかった。彼は常に当時の私には、考えの及ばないような問題を一人で考えていた。……好んで哲学の書物などを繙いた。私はある時彼からスペンサーの『第一原理』という本を借りた。」

秋日和などには、二人でよく散歩した。黄色に染った小さい葉が、風もないのにはらはらと散る光景をよく見た。「それが偶然彼の眼に触れた時、彼は「あッ悟った」と低い声で叫んだことがあった。ただ秋の色の空に動くのを美しくいと観ずるより外に能のない私には、彼の言葉が封じ込められた或秘密の符徴として怪しい響を耳に伝えるばかりであった。「悟りというものは妙なものだ」と彼はその後から平生のゆつたりした調子で独言ひごとのように説明した時も、私には一口の挨拶も出来なかった。」太田達人への

畏敬の念を語っている。

「彼は貧生であった。……間借をして自炊していた頃には、よく干鮭を焼いて佐びしい食卓に私を着かせた。ある時は餅菓子の代りに煮豆を買って来て、竹の皮のまま双方から突っ付き合った。」こともあった。

太田達人は岩手の下級武士の家に生まれ、金銭的には困っていたという。東大物理学科を首席で卒業したにも拘わらず、地方の中学校の教員として赴任したのは、貧しい家族の面倒をみることに、南部家から借りた奨学金返済という経済的な理由からだという。

二人は一九一四年、何年ぶりかで再会した。漱石四十七才、達人四十八才。「二人は別れてから今会うまでの間に挟まっている過去という不思議なものを顧みない訳に行かなかった。……」

〇は昔し林檎のように赤い頬と、人一倍大きな丸い眼と……ふっくりした輪郭に包まれた顔を有もっていた。今見てもやはり……同じ……ではあるが、それが昔しとはどこか違っている。

私は彼に私の口髭と揉み上げを見せた。彼はまた私のために自分の頭を撫でて見せた。私のは白くなって、彼のは

薄く禿げかかっているのである。

「人間も樺太まで行けば、もう行く先はなからうな」と私が調戯うと、彼は「まあそんなものだ」と答えて、私のまだ見た事のない樺太の話を色々して聞かせた。」

「彼の性質が鷹揚である」だけでは言いつくせない場面であろうが。

「我々はその晩帝劇へ行つた。…老眼鏡を出し手に持った摺物を読んで見る彼は、その眼鏡を除さずに遠い舞台を平気で眺めていた。「それは老眼鏡じゃないか。それでよく遠い所が見えるね。」なにチャブドーだ」

「差不多（＝大差なし）」という中国語がすぐ反射的に発せられたのは、中国帰りの太田達人の「老朋友」への親しさの故に、これまた「自然にそれほど雑作なく、拘泥わずに、するすると咽喉を滑り越したものだらう。」

漱石は『硝子戸の中』の「九」「十」全文の最後を

「その夜の帰りに電車の中で私と別れたがり、彼はまた遠い寒い日本の領地の北の端れに行つてしまった。

私は彼を思い出すたびに、達人という彼の名を考える。するとその名がとくに彼のために天から与えられたような心持ちになる。そうしてその達人が雪と氷に鎖ざされた北

の果に、まだ中学校長をしているのだなと思う。」と締め括っている。高等学校以来の親友への終生変らない思いである。漱石は翌一九一六年十二月没。四十九才。

漱石が「十」を掲載したのは一九一五年一月二十二日、この当時、太田達人は確かに「北の果に：中学校長」をしていた。

高田銀次郎編著『樺太教育発達史』（一九三六年八月）二三四頁「：樺太廳中学校：一九一二年四月設置、五月開校：初代校長として同年五月一日付を以て秋田県立横手中学校長太田達人氏任ぜられしが、一九二二年二月八日依願免官となり…」とある。樺太庁立第一中学校である樺太中学校の初代校長である。（一九二五年四月樺太庁豊原中学校開校にともない、同校は樺太庁大泊中学校と改称される。）

中学校教諭・校長・講師、北京大学堂副教習、必ずしも高いポストでない先生としての太田達人はどんな人だったのか。

太田達人が地方の中学校を回らなければならなかったのは二つの理由があった。一つには、前述のように家が貧し

い経済的な理由と、もう一つには彼には「新しい時代のために、若いうちに数学、物理をたたきこんでおく必要がある」という教育信念があつたためであるという。

そして赴任する先々で、そのおかれた立場においてまさに全力投球で、若い生徒達への教育、或いはその環境作りにも当つたと思う。

北京大学堂では数学、物理学を担当、後には日本語の教育にも当つた。

「文部省図書審査官 理学士 太田達人 右当大学堂師範館副教習（小官、正教習ニ副タルノ義）トシテ創立以来小官ヲ助ケテ諸般ノ計画経営ニ参シ、又一方ニテハ数学物理ヲ教授ス、本邦ニ於テ多年中学校主席教諭又ハ校長トシテ閱歴ニ富ム」と直接上司に当る服部宇之吉が評価し、また「克ク其業務ニ勉励シ成績頗ル見ルベキモノ有之候」と在清公使林権助は一九〇六年六月に報告している。（前掲『外交文書』）

北京に赴任して半年後、一時帰国して北野中学校を訪ね一場の講演会を開いた時、「……該学堂ノ教授上ノ用品購求等ヲ兼ネテ数日前帰朝セシナレバ東京ヘモ行カザルベカザル今日僅ニ閑暇ヲ得テ登校セシナレバ談話ヲ茲ニ止ムル

コトノ已ムヲ得サルナリ諸子之ヲ諒セヨ云云」と最後を結んだ。寸暇を得て講演会を開くその北野中学校生徒への思いと、それ以上に現任の北京大学堂での授業のより充実のための教育資材の調達等、そのために奔走する熱意が窺える。

北野中学校校長として、卒業式の告辞の中で、「諸子ガ既往ノ成功」も「将来ノ成果モ」、「誠実勤勉、四字ニ在ラシ」とのべ、太田校長の辞任、送別式の席上でも、同様の意を強調したのも、太田達人の教育信念を端的に表わしている。（『北野百年史』）

太田達人は、秋田中学校、横手中学校、樺太中学校各校長を勤めたあと、五十五才で、岩手県立盛岡中学校の一介の講師として赴任する。その時に太田達人についたあだ名は「サムライ」、「瘦軀鶴の如し」という感じで、風貌が端然としていた上、見た目にも、和服姿に上っ張りを着て、サムライそっくりだった、という。

ある年、詩人でもあつた某君が数学で落第になりかけた時、「一芸の士を落第させるわけにはゆきません。」と巧みに万事をとりなしたと。太田達人の内に秘めた暖かさがうかがえるという。

太田達人はいわゆる「立身出世の名誉欲」には恬淡であったという。東大物理学科を首席で卒業したにも拘わらず、地方の中学校回りも「彼自身は無論平気であった」というし、「ボート遭難事件」のあと、高い地位への推挙も太田達人が断つたというし、太田達人自身、東京で名をとどろかせる機会がなかった訳でないのに、名誉欲などは頭の片隅にも持たなかったという。漱石と親密だったことなど、ちよつと口に出せば、それだけで社会に通用するに違いないにも拘わらずである。

なお漱石の一九〇七年の作品に『野分』という小説がある。その小説の主人公白井道也は、太田達人の性格を漱石自身に融合させて作り出した人物という。主人公のものの見方には太田達人の人生を貫いた哲学を偲ばせているという。(前掲『図書館報』第三〇号)

(二) 中島裁之―東文学堂

東亜同文会編『対支回顧録』上巻七一〇頁
北京東文学社

「本社は義和団事変の後明治三十四年(一九〇一年)三月、熊本の有志中島裁之が創立した北京に於ける日本人の経営

した最初の学校であった。其設立の趣旨は中等学校程度の教育を支那青年に施すと共に日本語を伝習せしむるが主眼である。而して当時北京に在住して居た前保定府蓮池書院の山長呉汝綸が其顧問格で李鴻章及び袁世凱方面よりの補助に成ると云ふ。

教頭は…劍持百喜が之に当り、教習及び校員は横川省三、沖禎介、…三島海雲、…等十六人が居たが、其の内十名は三十七年の日露戦争の際特別任務に当った志士であった。

斯くて本社は戦後の影響と社長中島が洋行したので遂に閉校した。」

横川省三は、岩手県盛岡の出身で、東京朝日新聞に入社、花形記者として活躍し米國に遊学、東文学社の第一年度後学期に入社した。沖禎介は長崎平戸の人。上京して東京専門学校に入るが中途退学、北京に行き、横川と同じく同期入社した。横川、沖は、日露戦争が勃発すると、日本軍のために軍事探偵として東清鉄道鉄橋爆破の特別任務に従事し、ロシア軍に捕らえられ、ハルピンの処刑場で銃殺の壮絶な最後をとげた。(両人のことは『東亜先覚志士記伝』上巻「横川省三、沖禎介の最後」および下巻のそれぞれの

列伝参照)

東文学社については、佐藤三郎「中島裁之の北京東文学社について」(『近代日中交渉史の研究』昭和五十九年三月、吉川弘文館)に詳しい。また最近には、劉建雲『中国人の日本語学習史―清末の東文学堂―』(二〇〇五年十一月、学術出版社)があるが、ここではその創設期の事情だけに触れるにとどめる。

まず、中島裁之は一八六九(明治二年二月、熊本生れ。京都に遊学して西本願寺の大学林普通教授(現在の竜谷大学の前身)に学んだ。一八九一(明治二十四)年、中国に渡った。翌九十二年外務省の第二期留学生に採用され、日清戦争が勃発すると、第三師団附の通訳に任ぜられて従軍。九十六年三度目の中国入りをし、保定に赴き、当時碩学の名声高かった前述呉汝綸の蓮池書院に入門した。呉の薫陶を受けるとともに、呉の子弟に日本語と英語の手ほどきをすると同時に、中国青少年に新しい教育をすることの必要性を説いた。

呉汝綸の勸説で、甲骨文字研究でも有名な実業家劉鉄雲や内田康哉在清公使の資金的援助もあって、学校設立許可申請書を李鴻章らに提出して認可された。こうしてできた

のが「北京東文学社」であった。一九〇一年春、北京外城に設立された。

中島裁之は、設立された直後の一九〇一年六月、生徒中の希望者をつのり、日本修学旅行を計画した。はじめは生徒のほとんど全員が参加を申し込んだが、旅費が自弁であることが分ると、結局出発の時、中島に同行した者は十一名に過ぎなかった。六月三十日北京を出発し、神戸に上陸、大阪、奈良、京都、東京を廻り、大学から幼稚園に至る各級教育機関、新聞社、発電所、港灣施設、各種生産機関を見学した。

一行は七月十一日に大阪北野中学校に来校している。

『大阪府第一中学校 明治三十四年『日誌』七月十一日 木曜 雨』に

「本日午前九時二十五分、北京^マ在校中島裁之字成章、北京学校生徒拾名ヲ引率シ、本校授業ヲ參觀ノ為メ来校、全五十分退出」とある。

この時、同行した生徒十一名の中に、京師大学堂総教習代理蔣式理がいた。北京大学堂教授が何故、「東文学社の生徒」なのか。

実は、東文学堂の受験資格は一切問わず、さらに出願資

格に年齢、学歴、職業などは一切制限がなく、しかも「無月謝」だった。入学希望者は全員入学が許可されたのである。ただ、「精神健全ニシテ文義ヲ理解シ得ルコト」と「阿片ヲ吸ワヌコト」を条件とするのみであった。だから、北京大学堂教授の蔣式理も応募し得た。北京大学堂は閉鎖されていたし、新しい学問、日本語学習への熱意もあつたろう。

募集定員は三〇名としたが、応募者は、告示第一日目に六〇名、その後も増え続け、七日目には一八〇名に達するほど盛況だったという。出願者全部に一応入学を認めることにした。

志願者には、すでに進士、挙人、秀才の資格のある者から小学生に至るまで多種多様、職業、社会的地位も同様であった。入学志願者の学歴、学力に格差があるので、専門学班、普通学班の二班に分けて授業を行った。蔣式理は当然専門学班に入ったのだろう。

専門学班課程

九時〜一〇時 一〇時 〃 一一時 〃 一二時
月 読法 亜細亜地理 東亜之形勢

火 読法 万国史 俄(露)清関係論
水 読法 東邦近世史 議事院談
木 読法 亜細亜地理 東亜之形勢
金 読法 清国近世叢誌 俄清関係論
土 読法 政治 支那教学史略

普通学班課程

一時〜二時 二時〜三時
月 言語 万国史略
火 言語 物理階梯
水 言語 清史攬要
木 言語 百工新書
金 言語 物理階梯
土 言語 万国史略

当初は中島裁之は一人でこれらの科目を担当した。のちに体育の重んずべきことを説き、両班に毎日体操の科目をも加えた。

入学希望者については二八〇名に達した。午前・午後にわたる中島単独の授業は無理であり、教師を増員する必要が

あった。その頃、中国語修得などのため北京にくる日本人が何人かいたので、中島は、彼らの中から希望者を学社に招き、一人日一〇円程度の小遣銭を提供し、授業の分担を考えた。三島海雲は第二期入社の人であった。

先の日本修学旅行団一行は、六月三十日北京を出発、十日に神戸上陸、大阪、京都、東京を見学し、八月二十五日に北京に帰着した。その際、生徒の一人、前述の北京大学堂総教習代理蔣式理はなお日本に留り、日本の学制と学校事情の調査に当った。総教習呉汝綸への情報提供もあったろうか。翌一九〇二年六月、呉汝綸が北京大学堂総教習就任に先立ち、来日したのは、蔣代理の報告を聞き、改めて自ら日本教育事情視察の実施を決断したのであろう。

中島裁之は東文学社で多くの学生を教育した。一九〇五、六年、八千人、一万人に達していたという在日清国留学生の中に東文学社の関係者が何人かいたと思われる。中島裁之はその学社以外でも、以前に福島安正が張之洞から委託されていた中国人留学生の教育、指導にも当った。その一人に章宗祥がいる。二十一ヶ条要求問題発生後期から一九一九年五四運動期まで、日中外交交渉の任にあたった駐日

公使である。

(三) 三島海雲―内陸アジア研究所

三島海雲は一八七八（明治一一）年七月、大阪府豊能郡萱野村の西本願寺派教学寺に生る。漢学塾の弘深館に入り、泊園書院の藤沢南岳と並び称される大田北山から指導を受ける。西本願寺文学寮を卒業後、一時山口市の開導中学の英語教師をつとめたのち、一九〇二（明治三五）年二月北京に行った。それは前年、創設された「東文学社」の教習として第二期入社のためである。創設者中島裁之は、文学寮の先輩で、その中島からの要請であったという。

三島海雲の処世観の一つは、彼自身がいう「日本主義」があった。ある課題のおこる毎に、常に当時の日本の一流の学者、専門家の助言、指導をおおぐことであった。そして、これらの人とその後も交りを結んだ。

文学寮の生徒時代、のち朝日新聞社記者となる杉村楚人冠先生から可愛いがられ、以後交際した。

中島裁之に招かれ東文学堂の教習になり、当時の学生と

蒙古から満州へ調査旅行し、学生である王子修の「日華洋行」を支援し、行商を始める。奈良、吉野の山林王土倉四郎と協力し、日露戦争時の日本軍のために蒙古馬を調達した。蒙古緬羊の牧畜では大隈重信から「国策上大変プラスになる」と賛成された。横浜正金銀行・大倉組とも接渉し、三井物産の飯田義一専務、森恬支店長からは中国での商取引きの精神を教え込まれた。その「日本一主義」の成果の一つが「カルピス」の製造、発売であろう。

満蒙に旅した時、乳を重要な食品とする現地人の生活を目の当りにした。その延長から、カルピスの製造に至った。乳をカメラに入れ、乳酸菌で有害な細菌を駆逐して、酸っぱい乳のクリームをつくる。つまり脱脂乳を乳酸発酵させ、カルシウムと砂糖を加えて飲料とする、これがカルピスである。その正式発売までには永年の時間を要し、一九一九（大正八）年に至って実現するが、それまでの過程で多くの「日本一主義」者の助言があり指導を仰いだ。

東大教授鈴木梅太郎から乳酸に関する指導をうけた。また最初商品名を「カルシウム」＋「熟酥サルピス」から「カルピル」を考えたが、音楽家の山田耕作に相談したところ、音韻学の立場から「カルピス」の方が断然いいと助言があ

り、詩人の与謝野鉄幹、晶子夫妻もそれを聞いて大変喜び、激励してくれたという。

そして三島海雲にカルピスのヒントを与えたのは、『西域学文明概論』『西域文化史』の著者、のち京都大学総長になる「西域学」の第一人者羽田亨（一八八二―一九五五）であったという。両者は、一九〇七（明治四〇）年以降、兄弟のような親交を結び、五十年間に三百七十九通の書信を受け、学問のこと、いろいろなことを教示された。三島海雲は「カルピス」ののち、ある新たな事業をおこそうとして失敗したことがある。その後ある日、三島宛に「那須与一様」という書信が来た。中で「弓の名手も壇の浦では一の矢、二の矢は失敗した。三の矢で的中させた。」と激励したという。

三島海雲は西域学、内陸アジア学を研究する学徒、発酵学を研究する学徒の面倒をみた。それをのちに研究助成の領域を内陸アジア学より広くアジア学へ、発酵学より広く食品学へ、さらにもっと広く自然科学、人文科学全般へ研究助成のための対称をひろげ、三島海雲記念財団を設立するに至る。

財団法人 三島海雲記念財団設立趣意書

一、自然科学特に食品の研究と人文科学の研究を助成する事

二、上記の研究結果を応用して人類の福祉に寄与する事

本財団の基本金は極めて僅少である。

しかし創立者三島海雲の現有全財産を注入したものである。

その狙うところは、私欲を忘れて公益に資する大乘精神の普及に在る。

広野に播かれた一粒の麦になりたいのである。

昭和三七（一九六二）年七月七日

設立発起人代表 三島海雲

三島海雲はいう。「これからの世界は、学術の競争、知力の競争の世界である。知力の競争とは、すなわち、立派な学者をつくることである。また私のいう学術とは自然科学のみでなく、それを支える「良識」すなわち、人文科学を含むものとする。ここに三島財団の特色がある。」と。

また、『京都大学文学部の百年』（二〇〇六年六月）一八

五頁に「羽田記念館……本学第一二代総長故羽田亨博士の内陸アジア研究における偉業を顕彰し、さらに後進に研究の場を提供することを目的として、三島記念財団や武田薬品工業株式会社などの寄付を得て、一九六六年に建てられた」とあるように、三島海雲はさらに現有の持ち株全部百万株を拠出し、武田長兵衛はじめ多くの人々の協力を得て、内陸アジア研究所＝羽田記念館を建設し、京都大学文学部に寄付したのである。三島海雲も「やっとな羽田亨の恩義に酬いることができた」といつている。今は内陸アジア研究所をユーラシア文化研究センターと改称し、歴史研究、言語研究、宗教研究の三分野にわけ、ユーラシア文化研究の場となっている。

「国利民福」の立場から企業をおこし、その利益を、大乘思想の精神から私財をもって財団を設立し、若い研究学徒への研究費助成を行ない、また研究の場を提供した。「日本一超俗的な経営者」といわれる所以であろう。

三島は「日本一主義」で各界の一流の人物と交際する。そして「一流人物に愛される男」といわれるようになる。

一九六二年七月、三島海雲記念財団発起人に名を列れた

人の名前（当時の肩書とその後。二人のカルピス社長、副社長を除く）をあげれば、山田三良（国際法、前学士院長）、天野貞祐（独協大学長、元文部大臣、文化功労者）、栗田淳一（日本石油相談役）、川西実三（日本赤十字社社長、京都・東京府知事）、坂口謹一郎（東京大学名誉教授〔発酵・醸造学〕、文化勲章）、吉川幸次郎（京都大学教授〔中国文学〕、文化功労者）、向井忠晴（元三井物産社長、元大蔵大臣）らである。各界のトップの人が賛同している。

何故一流の人物が「彼を愛し、彼を支持するのか、…一言でいえば、三島海雲さんの人徳の然らしむるところだ」という訳であろう。

（三島海雲『私の履歴書』（日本経済新聞社、一九六六年四月）『初恋五十年』（一九六五年）、島野盛郎『三島海雲』『食を創造した男たち』（一九九五年十月、ダイヤモンド社））

（四）清水安三―「北野と南開」

清水安三は、一八九一年六月、滋賀県高島郡に生れる。膳所中学校を卒業して、同志社大学神学部に入學。一九一七年牧師として中国に遣わされる。北京に移り、一九二〇年、朝陽門外に崇貞工讀女学校（崇貞学園）を設立した。

貧しい子女に、手に職をもたせて、ハンカチや靴下を作つてそれを売つて収入を得さしめ、同時に彼女らに教育を施すという意図であった。そして清水安三は崇貞学園の理事長に、天津南開學堂の創設者張伯苓（張寿春）を推載した。

清水安三による崇貞学園設立前後のことは、自伝『朝陽門外』（一九三九年、朝日新聞社）や、山崎朋子『朝陽門外の虹―崇貞学園の人々―』（二〇〇三年七月、岩波書店）李紅衛『清水安三と北京崇貞学園―近代における日中教育文化交流史の一断面―』（二〇〇九年二月、不二出版）に譲るとして、ここでは清水安三が書いた「南開中学校」を紹介する。ここには史実に合わない所がいくつかあり、それについては拙稿「大阪愛珠幼稚園・北野中学校を参観した清国人」（『奈良史学』第二十五号、二〇〇八年一月）で検討したが、ここで再録する。

また、これに似た文が石川忠久『漢詩の風景』の中にあるので、巻末に付記しておく。

清水安三『北京清譚・体験の中国―「南開中学校」』（一九七五年六月、教育出版社）

「ではついでに、ここで天津の南開中学校の縁起についてひとくさり述べることにしよう。

それは日清戦争より少しく前のことであった。清国に鋼鉄の軍艦が持たれたのでそれを日本に見せびらかすためであったらう。日本へやって来て大阪湾に碇泊している間、水兵や士官達はぞろぞろ市内見物を行った。その折、海軍中尉として乗艦していた張伯苓^{ジャボウリン}も、一、二、三の部の部下水兵を伴うてぶらぶら町を歩き回ったのだそう。すると路傍に「北野中学校開校式」という立看板が出ていたというのである。これを見た張中尉がこの中に入ったところが、校長は珍客として来賓席に迎えた。通訳を伴っていなかったのだ、ただじつと聞いたり見たりするに止まったが、その来賓席で脳裏にきらめいたことは、「日本ですらも中学校を建てた。中国たるもの中学校を建てずば」であった。張氏は帰国してただちに海軍を桂冠、天津に南開中学校を創立したというのである。北野と南開、これはまるで異なった意味である。「北方の野蛮」「南からの開化」、まことによい対称である。北野は大阪の地名に過ぎないのであるが、張先生はそれとは知らず北の野蛮と解されたのであった。晩年張伯苓博士は重慶に分校をお建てになって、飛行機でもって、天津、重慶間を行ったり来たりしておられた。

太平洋戦争の勃発した頃には、全中国の各地の大学の総

長中十六名は、天津の南開中学出であった。そして現今では周恩来首相如きが南開出である。張伯苓博士が大阪から帰って後ずっと海軍をやめず軍艦に搭乗しておられたら、到底かくも多くの人材を中国にささげることが出来なかつたことであろう。

不肖私は、大正九年（民国九年、一九二〇年）到北京朝陽門外に崇貞学園を創立したが、創立以来張伯苓博士をば崇貞学園の董事長（理事長）に仰ぎ来たが、日支事変中、日本軍が南開中学校のキャンパスに空から爆弾を投下し、同校の図書館を全焼せしめるや、張先生は重慶に行つてしまわれたので、以後終戦に至るまで私は北大の総長錢稻蓀先生に董事長になつてもらつた。…」

この話のもとの「張先生は元海軍軍人。こんなエピソードを話されたことがある」とは清水安三の「北野と南開（時事通信社『内外教育』第二三五七号、一九七二年五月九日）にある。（内容は両編ほぼ同じ。大部分は重複しているのどこでは再録しない。）

右の「南開中学校」の中には史実に合わないところや潤色された部分がある。

(一) 「日清戦争（一八九四年八月～一八九五年四月）より

少し前、清国の鋼鉄の軍艦：日本に見せびらかすため：」
とあるが、たしかに一八九一年、ドイツ製の当時超弩級
鋼鉄艦「定遠」を旗艦とする北洋艦隊六隻を提督丁汝昌
が率いて日本に示威運動に來たことがある。しかし、そ
の時に、張伯苓が搭乗していたのかどうか。張伯苓は一
八七六年四月生れ、当時十五才。一八九九年に天津北洋
水師学堂に入学はしていたが。

(二) 張伯苓は一八九四年に天津北洋水師学堂を首席で卒
業、濟遠艦に搭乗し、日清戦争に従軍。したがって日清
戦争前の一八九一年に「海軍中尉として大阪に行った」
はないと思う。

(三) 日清戦争前に「大阪に行き「北野中学校開校式」の來
賓席に迎えられた」とあるが、そもそも北野中学校は日
清戦争以前には存在しない。戦争以前は大阪第一尋常中
学校、大阪第一中学校、堂島中学校と呼称されており、
従って日清戦争前の時期に「北野中学校開校式」はあり
得ない。北野中学校は、一九〇二年四月一日、北野芝田
町に校舎が新築されてそこに移転、校名を堂島中学校か
ら北野中学校と地名に由来して改称したのである。（そ

してその当時の校長は前述の太田達人であった。）

(四) しかしその一九〇二年四月にも、公式の「北野中学校
開校式」は挙行されていないが、その年六月一日には「新
校舎落成式」が、大阪府知事以下、百数十人の來賓を迎
え、盛大に挙行された。この時張伯苓が列席していたか
は確認できない。一九〇二年には、そもそも來日してい
ない筈。後で述べる大阪高商の囑託教授（中国語、数学
担当）梁直臣が、來賓の一人として招待されていたので
ないかと想像する。

(五) 張伯苓（張寿春）と梁直臣二人は、たしかに一九〇三
年五月二十二日（金）には北野中学校を訪問して授業を
參觀した。しかし、当日は「北野中学校開校式」とか特
別な式典のある日でもなく、通常のウィークデイの一日
であった。また「北野中学校開校式」の式典には「通訳
なしで行った」とあるが、五月二十二日の授業參觀は前
述の梁直臣を通訳にして案内してもらっていたと思う。
校長室に招き入れられ、どの程度学校の沿革や教育課程
の説明をうけたかは不明である。張伯苓は、翌二十三日
には大阪愛珠幼稚園を參觀し、「來觀人姓名録」に「張
壽春」と自署している。この前後たしかに來阪していた。

(六) 梁直臣、張伯苓ならずとも「北の野蛮」と読める「北野」を「校名」にするのはおかしいと中国人なら誰しもそう思うだろうが、兩名が北野中学校を參觀の頃は、それが北野芝田町の地名に由来することは知っていた筈だと思ふ。

(七) 「南開中学を設立……北の野蛮に対して南の開けた地の意でつけた」に関しては、張伯苓は「四十年南開学校之回顧」の中で、「一九〇四年、与嚴修先生、東渡日本、考察教育、……帰国後、正式成立中学。……中学校成立後之四年……得邑鄭菊如先生捐城西南名南開地十畝為校址、遂籌經費、起建校舍。是年秋、乃嚴宅遷入新校舍、校名改称南開中学。蓋以地名也。」(王文田等著『張伯苓与南開』所収、『伝記文学叢書』二二六、一九六八年)と南開は地名に基いて命名したと明記している。

別の文にも「嚴宅的新式中学堂揚名津埠、毎年学生投考者逐年加多、原址不能容納。一九〇六年天津邑紳鄭菊如先生、以西南城角一塊空地、約有十畝、捐給学校校址、該地名南開窪、学校接收該地後、就開始建築校舍。建築費亦由嚴先生籌募。首次建築大樓一座、取名範孫樓。一九〇八年秋新校落成、即遷入開學上課、因地名「南開」、

遂校名為「南開中学」とある。(王文田「張伯苓先生与南開」(中)『伝記文学』第二二卷第六期、一九六八年六月号)

(八) また日本の『天津居留民団三十周年記念誌』(一九四一年五月)の「南開大学」の項に、「嚴範孫……の家塾が南開大学の前身であった。……一九〇七年、城南南開に校舎を新設し、南開学校として開校した。南開の地名は元「南窪」即ち城南の野原の意味であって、後此れを校名としたものと称はれる……」

いづれも校名は地名に由来すると記している。

張伯苓の体験に基づく様々の事象を構築して、この「南開中学校の縁起」物語が書かれたと思ふが、それは一九七五年のこと。清水安三が崇貞学園の理事長に推載した張伯苓からこの「エピソード」を聞いた時はそれより五十年以上も前の一九二〇年前後のこと。梁直臣、張伯苓兩人が北野中学校を參觀した時はさらにそれより一七年前の一九〇三年のことである。

遠い昔のこと、言い違い、聞き違い、忘却、失念もあろう、事象の混同、誤認もあろう、潤色もあろう。「南開中学校」

はまさに「縁起物」として明治末年の日中文化交流を物語る「おもしろい」「エピソード」ではある。

史実に合わないことを、ただここで論うだけが本意でない。

牧師として中国に渡り、困難な環境のなかで、貧しくて、若くして身を鬻ぐ中国人子女のために崇貞学園を創設、経営するその崇高な精神・行動は誠に偉大で敬服のかぎりである。「北京の聖者」といわれる所以もいささかも減じない。崇貞学園は「井戸を掘った人のことは忘れない」とて、今日でも、陳経倫中学として継承されているという。

清水安三の張伯苓への思い入れは大きい。師事する思いである。張伯苓を敬愛してやまない。兩人とも基督教徒。それに基づいての学校の創設、経営。清水安三は、張伯苓を「まさに中国の新島襄、偉大な教育者であった。」とたたえる。周思来首相をはじめ、一六人の大学の総長、その他多くの人材が南開中学で張先生の教えを受けたことを、「南開中学の存在は、わが明治維新の松下村塾あたりに匹敵するもの」とする。(清水安三「北野と南開」)

二、大阪の中国語教育

(一) 府立大阪中学校

『大阪府誌』第四編教育史、五八〇頁に

「…抑、本府公立学校に於いて東洋語学の教授を開始せしは明治十三年（一八八〇年）三月師範学校内に府立中学校を分設して支那語を教授したるを以って其の嚆矢とす」とある。その経緯の背景として、まず『北野百二十年』より関係する年表を示す。

• 一八七三（明治六年）・四・二三

東区難波御堂内に欧学校開校（本校の「鼻祖」）（欧学校は五・二、集成学校と改称）

• 一八七四（明治七年）・五・一四

難波御堂内に府立の教育伝習所（翌年大阪府師範学校と改称）設立、集成学校と同居

• 一八七七（明治一〇年）・六・六

中之島常安町に新校舎竣工、移転して開校式。

• 一八七八（明治一一年）・四・一五

大阪府師範学校が、法円坂の官立師範学校跡へ移転。本校との同居解消。

●一八八〇（明治一三年）・三・一

大阪府師範学校に府立中学校を分設。中国語を教授。

●一八八〇（明治一三年）・六・三〇

府立中学校廃止され私立中学校となる（翌一八八一・二・

二、府立中学校に復帰）

一八八〇年三月の中国語授業の開始の事項に関しては『北野百年史』一二八頁に次のように記されている。

天第二十九号

今般東区法円坂町師範学校内へ府立中学校ヲ分設シ、支

那語学ヲ教授可致候条、志願ノ者ハ同所へ可申出、此皆管

内無洩相達候事

但本年三月一日ヨリ開学其学科如左

明治十三年二月廿八日

大阪府知事 渡辺 昇

支那語学課程表（簡略化して記す）

第一年 習字楷書 授音儒書 授語単句単語 句法 俗牘

第二年 習字行書 授音雜書 授語單語話本、話稿

第三年 習字草書 授語歴史 史牘、清典

後に記す中国人教師盧永銘もあり、かなり充実した教科課程だったと思われる。

(二) 興亜会支那語学第二分校

『大阪府誌』にある先の文にすぐ続けて「該教科は期年ならずして中学校の廃止とともに、興亜会に委託したりき」とあり、委託に至る経緯については、『興亜会報告』第九集 明治十三年（一八八〇年）八月廿四日「大阪興亜会第二分会歴史」に左の如くある。

「…明治一三年二月二三日ヲ以テ…（振亜会）ヲ改称シテ興亜会ト号シ、更ニ興亜会支那語学校ヲ開設ス、…同五年五月…興亜分会ヲ神阪ノ両所ニ置カントシ…是レヨリ先西京東派本願寺ニ於テハ別ニ見ル所アリ、既ニ清人汪啓棟ヲ聘シ、教師校中ニ支那語学部ヲ置キ、衆生徒ヲ教育スルノ事アリシガ、今回大阪興亜分会ノ挙ヲ聞キ、頗ル之ヲ称賛シ、教師校中支那語学部ヲ本会ニ合併シ、教師汪啓棟及ビ其生徒教育ノ事務ヲ本会ニ委託シ、…」

同年六月十一日府下平野町浄専坊ヲ分会仮事務所トシ亦此

ニ支那語学第二分校ヲ開設シ汪氏ヲシテ教務ヲ司ラシメタリ：

同月十九日大阪商法会議所ニ於テ分校開校式ヲ挙行ス……五代（友厚）……汪啓棟ノ諸氏交モ祝詞ヲ演舌セラレ……

同月二十二日、大坂府管理支那語学教授ヲ委託セラレ、教師盧永銘氏及ヒ所屬ノ生徒ヲ讓与セラレタリ

同廿五日平野町ノ不便ナルヲ以テ、更ニ北久太郎町四丁目妙琳坊ヘ事務所及ビ学校ヲ移シ、本願寺生徒及ビ教師ハ、

全町東本願寺ヘ寄宿ス：

同月廿四日語学生徒現員ヲ数フルニ二十壹名アリ、今後漢学変則教科ヲ開カバ五十名ニ至ルベキ景状ナリ」（『興亜会

報告・亜細亜協会報告第一卷（一九九三年九月、不二出版）

「……六月二十二日、大坂府管理支那語学教授」は『北野百二十年』の年表、三月一日の「大阪府師範学校内に府立

中学校を分設、中国語を教授」を指すものであろう。

以下は『右書』より引用する。

興亜会支那語学第二分校規則

○校長ノ職務（省略）

○教員ノ職務（省略）

○教授ノ規則（省略）

一科業時間ハ一日三時間トス其科目左ノ如シ

(一)支那普通官話 (二)古書音読 (三)時文尺牘并ニ照会文

(四)年ヲ分テ二期トス即チ一月ヨリ七月迄ヲ前一期ト

シ、九月ヨリ十二月迄ヲ後一期トス (五)毎月末……小

試験ヲ為シ……毎期末ニ大試験ヲ為シ優等ニシテ将来

ニ望アル者ハ……清国ニ游学セシムルアルヘシ

一毎日曜日ノ午後、大祭日并ニ歳首歳末及ヒ八月中ヲ休業

トス……

○入学退学ノ規則

一生徒ハ小学卒業以上学力アル者タルベシ

但シ語学ノミヲ望ムモノハ此限ニアラス

一入学金五拾錢入学ノ時本校ニ納ムヘシ

○生徒ノ規則（省略）

○月謝ノ規則

一月謝ハ毎月五拾錢トシ毎月第一月曜日ニ納ムルヘシ……

但シ晝学夜学ヲ論セス皆本則ニ準ス

……

明治十三年六月 興亜第二分会

先の「第二分会歴史」の文末の「今後漢学変則教科開カハ五十名ニ至ルベキ景状ナリ」の漢学変則教科とは、興亜会支那語学第二分校の「教授ノ規則」に、大阪府師範学校内に分設された府立中学校の「支那語学課程表」を加えて新たに編成する教科かと思われる。また、「五十名」とは興亜会支那語学第二分校の二十一名と府立師範学校にいただろう三十名？を加えた数字かと思われる。こうして、興亜会支那語学第二分校は新たな体制で再出発した。

なお、「明治十三年六月十九日大阪商法会議所ニ於テ分校開講式ヲ挙行ス」の直後の事情に関し、毛利敏彦「私立大阪商業講習所の誕生と五代友厚」(『大阪の歴史』第十八号、一九八六年三月)を参考に引用する。

五代友厚は一八三五年薩摩藩生れ、上海、フランスに渡り、帰国後、大阪在駐の外国官判事などをつとめ、七八年大阪株式取引所、大阪商法会議所を創立した。

五代友厚は福沢諭吉の商業校論に触発され、大阪にも同種の学校の設立の計画を立て、府下有志の十数名と謀って設立の準備を始めた。一八八〇年(明治十三)七月に至って「大阪商業講習所設立之主意及規則科目」というパンフ

レットが刊行された。中に「社会ノ義務」を知るものは、不屈の気力をもつて「工業ヲ起シ商売ヲ盛ンニシ」て、「外ハ赤髯ノ黠奴ヲ斥シ」すなわち西欧列強の経済的圧力も排除し、「内ハ財用ノ痼疾ヲ治シ」て、「富国ノ基ヲ建テ」なければならぬ。そのためには「先ヅ各人、知見ト経験」を「得ルノ道ヲ講ズルハ最大緊要事」である。なかんずく、東洋のロンドンといわれる程の取引が盛大な大阪においてはなおさらである。「是レ則チ当府下ニ商業講習所ヲ設クルノ急務タル理由」だと設置の趣旨が述べられている。

つぎに、「規則及科目」については、

入学金は一円、授業料は月額五十銭、修業年限は学力差に応じて伸縮するが、一年六ヶ月を標準とする。教育課程は第三級から始まって第二級、第一級へと進み、さらに研鑽を望むもののために専攻科に担当する級外科が設けられる。学科目編成は「簿記学」「素読講義」「習字作文」「算術」の四科目が基となっている。その他、所内に会社、官庁、取引所などを設けて、「実地演習」の日が二十五日乃至三十日間設けられ、「実地商売取引ヲ熟練セルムルノ工夫」であり、これは開所後、所外にも公開され、市民の関心を広く集めたという。

また、級外科における外国語教育も特色を示している。英語が教授されるのはいうまでもないが、それと並んで支那語（中国語）がカリキュラムに組まれているのは注目すべきである。当時の大阪経済界における中国貿易の関心を反映するものであらう。また中国語教育は、興亜会支那語学校に委託するとなつてゐるが、これまた講習所設立計画が、興亜会と深い縁故を有していたことを側面から表わしている。

当時、三種出ていた『興亜会員名簿』のいづれに出てゐる興亜第二分会所属の創立員をあげれば、五代友厚、門田三郎兵衛（設立推進者）、土居通夫（大阪電燈会社社長）、村山竜平（朝日新聞社）らである。

一八八〇年（明治十三）十月三日の『朝日新聞』に掲載された生徒募集公告によれば、

「…入学志願ノ諸君、十月五日ヨリ十五日マデニ、左ノ仮事務所へ申込有之候也」とあり、商業講習所創立仮事務所は北久太郎町四丁目の「興亜分会」に置かれた。

そして入学を申込んだ生徒は、申込受け開始より二週間、「已に百余人になつた、後日の盛大は今より早く思ひやられる。」という。

こうして市民の好評に迎えられた大阪商業講習所は、いよいよ、一八八〇年（明治十三）十一月から、西区立売堀北通り三丁目十七番地の旧町会所において授業を開始した。

即ち、商業講習所は興亜会がその設立に深くかかわり、そこでの中国語教育も興亜会に委託された。

なお、私立大阪商業講習所は、今日の大阪市立大学の五つの源流の一つで、設立は一番早い。

一八八〇年三月府立大阪中学校での中国語教育開始から六月興亜会に委託されるにいたる経緯はや、複雑で、あわただしく急展開するが『北野百二十年年表』『興亜会報告』よりまとめれば次のようだろう。

京都東本願寺は教師校中に中国語学部を置き中国語教育を行つていた。一八八〇年六月十一日、興亜会が、大阪府下平野町浄専坊に興亜会大阪分会仮事務所を設置した際に、京都東本願寺教師校の清国人教師汪啓棟及び生徒教育事務が興亜会大阪分会に委託され、そこに支那語学第二分校が開設された。一方、これより先、同年三月に、東区法

田坂に移転していた大阪府師範学校内に、府立中学校が分設されて、中国語授業が開始されていたが、同年六月二十二日府立中学校の廃止に伴い、府立師範学校より中国語教授事務を興亜会に委託され、清国人教師盧永銘及び生徒を譲与された。興亜会は六月二十五日、府下平野町から東区北久太郎町難波御堂（＝東本願寺別院）内に支那語学第二分校を移し、清国人教師王啓棟と生徒二十一名も移った。難波御堂はもともと府立（北野）中学校の鼻祖である欧学校が開校された場所であるが（一八七三（明治六）年四月）、七七年（明治十年）六月に同校は堂島常安町に校舎を新築し移転していた。

(三) 市立大阪商業学校

一八八五（明治十八）年三月、修業年限三ヶ年として設立された府立大阪商業学校は、八九（明治二十二）年大阪市に移管され、市立大阪商業学校と改称された。学校は北区堂島浜通りの新築校舎に移り、さらに九三（明治二十六）年四月校則を改め、二年づつの予科、本科と本科の上さらに修業年限一ヶ年の高等科を設置した。

そして「明治二十七（一八九四）年、朝鮮東学党事変以来、

日清戦争となり、東亜に対する世人の注目を集め、戦勝の余慶は商事の交通更に頻繁を加べきを察し、支那朝鮮語学の修業を望む者頗る多きを以て、九四（明治二十七）年十二月に至り附属語学部規則を定めた。」（『大阪府誌』）

『市立大阪商業学校一覽』（明治二八年全二九年版）

○附属語学部規則

第一条 本部ハ主トシテ商業ニ必要ナル支那朝鮮語学ヲ教授ス

第二条 修学年限ハ支那朝鮮共ニ各一ヶ年トス 但時宜ニ由リ其年限ヲ伸縮スルコトアルベシ

第三条 学期ハ四月一日ニ始リ翌年三月三十一日ニ終ル且

設置初年ニ限り……

第四条 授業時間ハ毎夜凡二時間トス

第五条 学科科目ハ専ラ会話作文等トス

第六条 毎学期ノ終リニ於テ試験ヲ施シ成績ニ由リ證書ヲ

附与ス

第七条 入学志願者ハ年齢満十三年以上ニシテ語学ヲ修メ

ルニ足ル学力アリト認ムル者トス

第八条 入学志願者ハ当地在住ノ身元引受人ヲ立テ入学ヲ

申出ツヘシ

第九条 授業料ハ一学年金五円トシ四月十一月ノ二期分チ

指定ノ日ニ前納スベシ

第十条 設置初年ノ授業料ハ……

第十一条 休日ハ日曜大祭祝日冬期夏期休業トス

第十二条 本則ハ明治二十八年一月一日ヨリ実施ス

と規則を定め、募集を始めた。

「ここに特筆すべきは、九四年十二月に附属語学部規則を定め修業年限一ヶ年で「商業ニ必要ナル支那朝鮮語ヲ授業ス」としたことである。日清戦争の影響があったものと思われるが、翌九五年一月から入学志願者一八八名から選ばれた五十三名にたいして「支那語」夜間授業を、二月から一七名から選ばれた五十五名にたいして朝鮮語授業をそれぞれ開始した。相当人気があったようである。」(『大阪市立大学百年史』全学編上巻、七二頁、一九八七年十一月)とあるが、しかし長続きは難しかった。「翌九六年四月においては、支那語学科に二十五名、朝鮮語学科に四名の入学者を得たのみという。九七年四月を以て、該語学科を中止し、さらに本科生徒中志望により両国語の一つを兼修せしめることに改めた。」(前掲『大阪府誌』)

(四) 市立大阪高等商業学校

市立大阪商業学校高等科は明治三十四年(一九〇一年)四月、市立大阪高等商業学校と改称される。当校の教授嘱託に二人の中国人が在任した。

・梁直臣(明治三十五年四月〜明治三十七年三月)

・孟繁英(明治三十七年三月〜明治四十年一月)

(『市立大阪高等商業学校三十五年史』「現旧職員一覧表」(一九一五年三月))

孟繁英は、一九〇四年五月二十日、大阪愛珠幼稚園を參觀し「来觀人姓名録」に「清国奉天府海城県人、現大阪高等商業学校教員」を自署している。

『市立大阪高等商業学校一覽』(明治三十八年版)「高等科本教科書配当表」に第二外国語、孟繁英、「第一年級」―言語入門、「第二年級」―商買問答、「第三年級」―商店問答とある。高商では梁直臣の後任だったのだろう。

梁直臣については、在任時の使用教科書等も分らない。

大阪府立北野中学校、明治三十六(一九〇三)年『日誌』「五月二十二日、金、晴」の項に

「大阪市立高等商業学校清語、数学教員梁直臣(清国人)及張寿春來校シ授業ヲ參觀ス」とあるが、梁直臣について、

肩書の清語教員はネイティブとして当然としても、一方の数学教員については、どこで、どのような近代教育を受けた人なのか分らない。

前述のように、京師大学堂総教習呉汝綸が来日した時、一九〇二年六月二十三日の中之島の大阪倶楽部ホテルで催された「碩儒呉氏一行招待会」に列席している。この歓迎会の列席者は「大阪朝日新聞上野理一社長、大阪毎日新聞小松原英太郎社長、大阪新報社山田敬徳社長、大阪商船中橋徳五郎社長、紡績連合会山辺丈夫会長、三井物産支店長、日本郵船支店長、漢学者藤沢南岳（泊園書院院主）、孫実甫（在阪華僑の代表的存在）、梁直臣」らである。（『大阪毎日新聞』六月二十五日）

大阪の新聞界、中国貿易と直接・間接に係る実業界、文界のトップと並んで招待されるほどの人物であることは分る。

それ以外では、後述の西島良爾の著す『対訳日清會話六十日間卒業』に序文を寄せている。

なお、招待会の列席者の一人、孫実甫は在阪の華僑の代表格、川口町三十二番地益源号の華商である。翌一九〇三

年大阪天王寺一帯で第五回内国勸業博覧会が開かれた際、「人類館」にアヘンを喫する清国人、纏足する清国女性を来観者に縦覧させることを、清国人を侮辱するものとして「人類館陳列問題」がおこった。この時、孫実甫はこれに反対する在日清国留学生の委託をうけ、人類館問題解決のため、関係機関に働きかけ、解決に努力した。（拙稿「大阪博覧会（一九〇三年）と中国」〔『奈良史学』第十三号、一九九五年十二月〕）孫実甫は別名孫滄。一九〇四年十月八日、大阪愛珠幼稚園来観した時、肩書を「前浙江留学監督」と自署しているが、一九〇九年六月二十一日、再来観の時は単に「清國商人」としている。孫文らの革命派との関係がどの程度まであったのかよく分らない。

(五) 私立大阪外国語学校

『大阪府誌』五九六頁「私立大阪外国語学校」に、

「明治三十三（一九〇〇）年六月、富岡半三郎の創立に係り、当初西区長堀南通三丁目に開校し、学科を英・独・仏・清の四学部に分ち、修業年限を二ヶ年とし、高等小学校第二学年卒業以上の学力を有するものを入学せしめた。爾後、屢校舎を移転し、漸次校運の發達を来し、目下府下に於け

る外国語教育機関として、明星外国語学校と共に有為青年の教養に力めつつあり。」

とあるように中国語学科が右学校に設置され、授業をしていたようだが、この外国語学校のその後の情況、或いは創設者の人物像はよく分らない。「目下府下に於ける…」とあるが、『同誌』の出版は一九〇三年六月である。

(六) 大阪清語学校

同じ頃創立されたものに大阪清語学校がある。創立者は西島良爾。

『東亜先覚志士記伝』下巻、『对支回顧録』下巻、柴田清繼「在阪時の西島良爾とその中国語教育活動」(『中国学論集——海・太田両教授退休記念——)(二〇〇一年四月、翠書房)等よりみる。

西島良爾は一八七〇(明治三)年十一月、静岡県に生れ。二十才の時、静岡選拔生として上海日清貿易研究所に入學し、荒尾精らの薫陶をうけた。卒業後一時沼津で教師をしていたが、一八九四年日清戦争が始まると、陸軍通訳官となって奉任待遇をうけ出征し、戦後台湾総督府にも勤務した。一八九九年に、大阪控訴院及び大阪地方裁判所の中国

語通訳となった。その大阪在任中に大阪清語学校を創設し、多数の子弟を教育し、中国語の普及につとめたのである。一九〇四年日露戦争が始まると、ふたたび、陸軍通訳として満州各地に転戦し、帰国後は神戸地方裁判所の通訳となり、以後二十年間は神戸に在任して活動した。

前掲柴田論考のまとめによると、

「大阪清語学校は、西島良爾が一九〇〇年前半、或いは一八九九年末に創設したものの……西島の自宅、大阪市西区南堀江上道一丁目百三十五番屋敷に設けられており、その評議員は石塚猪男藏(三十八才、松雲堂という出版社を経営し、西島が著した中国語教科書も、その相当数が石塚の手によって出版されている。)で、校長は大阪セメント株式会社取締役で、泉尾土地株式会社の取締を兼ねていた清水芳吉、講師は大阪控訴院及び大阪地方裁判所の通訳官で、それまでに数多くの中国語教科書を出して、評判の高かった西島(三十一才)である。授業時間は一日二時間、学生は延べ三十数名いた。また、この学校は……夜学であったろうし、規模からすれば私塾とでも言うべきものであったようであるが、会報や教材の発行も行い、その活動は盛んであったよう……」

三十数名の生徒に一度に西島個人の邸宅で授業するのは無理で、恐らくグループ別授業であったと思われる。

さらに延べ三十数名の授業者の中の二十数名は、陸軍関係者で、日露戦争に従軍したことが、西島良爾の著した『日露戦没従軍漫録』巻末の名簿に、その氏名と所属が記されている。

また西島良爾はこの清語学校で中国語を教える以外にも、先述の私立大阪外国語学校にも出講し、神戸に移ってから、神戸商業補習学校の中国語講師をつとめたようである。

西島は、中国語講師としての必要から、数々の中国語学習書を著述・出版した。それらは授業の際の教科書とした。上海日清貿易研究所時代から資料を収集して著作したものの、清語学校で使用した教材を著書にしたもの、数々である。厳修は『東游日記』の一九〇二年八月十七日の条に「西島君居漢口、上海数年、通吾国語言、所著清語書數種、日本人頗争購之、即其家設清語學校、學生三十人……」とあり。またその一冊『対訳日清會話六十日間卒業』（一九〇二年四月初版、松雲堂）は、二年のちの一九〇四年二月に第六

版と版を重ね、相当に読まれていたようである。そして中国語学習方法は、基本的には「譜熟習練」、例文をまるごと暗唱させることを主とした教授方法だった。

（なお、厳修は天津の人、一八六〇年生れ、二十四才で進士、貴州学政となり、一八九八年戊戌改革の際、「経済特科」設置を上奏するがならず。教育立国の道にたざさわる。一九〇二年来日、〇四年には先の張伯苓と同伴で再来日。二次の来日の記録『東游日記』は一九〇五年十二月、武安隆らの点注で、天津人民出版社から復刻出版された。校長の清水芳吉とは親しい間柄であった。）

このように、西島良爾は、中国語講師として中国語を教授する以外の大きな仕事は、大阪・神戸の裁判所在任時代を通じて、官務の余暇を利用して、中国と係る数々の著書を書き、出版したことである。

神戸では、日中両文の新聞『日華新聞』及び雑誌『日華実業』等の編輯にもたざさわり、在阪時代より、中国語学習書、中国語辞典、中国事情に関する書、十数冊を著し、中国貿易にたざさわる実業家にも寄与し、日中の文化交流、日中の交易進展に大いに裨益した。

詩文、書画をよくする文雅の人であったが、ただ、ひたすらに著書、中国語を通して、日中交流のために三十年、一九二三（大正十二）年十月、神戸に没した。五十四才。

三、おわりに

明治末年、多くの日本人が中国大陸に渡り、多方面で活躍したが、中でも師範教育、実業教育、日本語教育に従事した人は二十世紀初頭だけでも数十人はいたという。中にはいわゆる「お雇い教習」として招聘された人もいれば、自ら出向いて学校を設立、経営する「日本人教習」も何人かいた。そして、日本語やそれぞれの専門教科を教えた。その中から、数人をあげてきたが、いづれも出発時は二十代、三十代の若い世代であった。

明治末年、改めて中国大陸に雄飛した青春群像をみる思いがする。それらの人物像を想像すると、広大な大陸、寒冷の茫漠とした蒙古平原、満州にたち向う偉丈夫。鷹揚な気質、澁刺とした気分。豪放な胆力、物おじしない資質。熱い情念、溢れる気概。バイタリテイ。自らの行動への信

念と自負をみる思いである。孤高を貫かんとする若い哲人。独りで、新しい世界を開かんとする先駆者。彼らは、「人に愛され、支持される人柄」、「この人の力になりたいと思わしめる人となり」である。そして、無私、無欲。名誉欲、権力欲のない、超俗的な人々でもある。その背後にあるのは、或いは仏教の、キリスト教の宗教思想なのか。恐らくは人を助け、人を愛するということであろう。

明治時代のよき青春群像である。

二十世紀初頭、北京・中国大陸で教壇に立つ「日本人教習」は数十人もいたという。しかし彼らのすべてが日本においてすでに中国語を修得していた訳ではない。「大阪の中国語教育」をうけた人は果して何人いるのか。「日本人教習」は、板書によって、或いは筆談によって、いわゆる「同種同文」の故に、ある程度意志疎通ははかれる。また、一九〇五年には八千人に達していたという、在日中国人留学生が、帰国後「日本人教習」のために、通訳の役を果した場合も多い。とくに中国から招聘された「お雇い日本人」の場合はそのようである。

これは他の分野でも同じであるが、中国大陸に行つて、

何かのを行なわんとする時、中国語修得が必須で、また成果をあげる王道であることも言うまでもない。

日本仏教の布教、日中貿易の進展も然りである。

日本仏教界では寺院の中に中国語学校を設ける場合もある。生徒もかねてよりの經典の読経を通じて、漢学、中国語学に入り易い環境にあったと思う。

大手の通商会社では自社内に貿易実務を教えるため、中国語修得の研修体制をつくり、通訳を育成してきた。

また、明治末年、あまた簇生した亞細亞振興のための団体や他の上海貿易研究所のように、中国語修得を当然その目標にしていた機関もあった。

こうした中で、何故「大阪の中国語教育」なのか。まず、大阪を初めとして、それに京都、神戸と、京阪神のもつ中国語教育を必要とする土壌、京阪神のもつ背景がある。

まず、京都東本願寺では、日本仏教の中国布教の必要から、中国人教師を招いて中国語教育をいち早く始めた。

西本願寺も中国布教を進めた。学術調査のため探検隊も中国に派遣した。

大阪府の公立学校で中国語教育を開始したのは、明治十三年（一八八〇年）三月、師範学校内に府立中学校を分設

して、中国語を教授したのがその最初であった。

そしてアジア振興をうたう興亜会は東本願寺中国語学部を併合し、大阪に中国語学第二分校を開設した。興亜会は同時に、大阪に商業講習所を開設した。大阪に二つの機関を設立したのは、「大阪は、東洋のロンドンといわれる取引の盛大な地」であるため、中国語を通して日中交易を盛んにし、大阪で「工業を盛んにし、商売を盛んにし、富国の礎をつくるためである」。

そして、大阪・神戸はともに大陸貿易の開港地である。貿易商社が置かれ、大陸航路が開かれ、明治末年は大阪から繊維製品、雑貨などの「サカモノ」を、神戸からは「安全マッチ」などを輸出していた。阪神はともに華僑も多く住み、中国語学習と関係ふかい地であった。神戸には中華学校、孔子廟、関帝廟、南京町（中華街）もあった。これらが背景の一つでもあった。

京阪神の中国語学習熱は大陸への関心の高まりとともに高まり、日清戦争期、一つのピークを示した。中国語学校もいくつか設立された。しかし、私塾ともいうべきもの、夜学のものもあり、教育課程の不足、環境の不備もあって衰退した場合もある。次の高まりは第一次世界大戦後、一

九二二年四月の大阪外国語学校の開設であろう。その学科の一つ中国語学科の初代教授に井上翠、他の講師に、言語学担当の新村出、蒙古語学担当の羽田亨を迎えた。

〔付記〕

石川忠久『漢詩の風景』の「ことばとこころ―「野」のニュアンス―」（大修館書店、一九七七年十二月）

「野」の語には野原の意のほかには野蠻、野鄙の意があります。これに関連しておもしろい話を紹介しましょう。

日清戦争より前、まだ中国と日本が友好的な時代に、中国のある海軍士官が大阪港に停泊して町の方に遊びに来ました。ふと見ると学校で幔幕などを張りめぐらせて式典をやっています。興味をそそられて近づいてみると、「北野中学校開校式」と書いてあります。その士官はこの名を見て異様な感じがしたといいます。その時、この士官は北野中学校で珍客として歓迎を受けたのですが、それはとにかく、彼はその時の「北野」という名が印象に残りました。つまり、この語は「北の野蠻」の意ですから（中国では昔北方に未開の異民族がいました）、学校の名としておかし

いな、と思ったのです。その士官は張伯苓という人ですが、後に海軍を退いて教育にたずさわり、天津に南開中学を設立しました。南開はすなわち北野の反対です。北の野蠻に対して南の開けた地の意でつけたものです。これは名門校で、後に周恩来さんなどもでた学校です。われわれは「北野」といえば天神様を連想するぐらいですが、漢語の感覚としては、パツと南開の反意語がでてくるようなものなのです……」

二〇〇六年四月に『新・漢詩の風景（CD付）』が出版されたが、この引用部分の内容は全く同じ。文中の「それはとにかく、」の「とにかく」は、「とにかくに」か或いは「ともかく」であろうが、それもそのまま同じである。

この「おもしろい話」の出典は示されていないが、それは前掲の清水安三『北京清譚・体験の中国』の「南開中学校」（一九七五年六月、教育出版社）を下敷にしていることは明らかであろう。